



2026年4月よりVIEW next 編集部配属となりました森です。初めての取材で静岡県・私立東海大学付属静岡翔洋高校を訪問しました。高校を卒業以来、久しぶりに触れる授業の空気に少し緊張しましたが、教室の窓から見えた雄大な富士山の景色に、一瞬で心が奪われました。この環境で学べる生徒の皆さんがうらやましくて仕方がありません。

この日拝見したのは、「自己調整学習」を取り入れた授業です（P.26 参照）。特に驚いたことは、生徒全員が主体的に学習に取り組んでいたことです。教える内容は同じでも、教師が用意する「仕かけ」次第で、生徒のワクワクや意欲がここまで引き出せるのだと、教育の奥深さを肌で感じました。

帰路に就く際、夕日に映える富士山を眺めながら、あの教室で見た生徒たちの真剣なまなざしを思い出し、胸が熱くなりました。（森）

VIEWnext

高校版 2026年10月号

10月20日発売
(予定)

Reader's VIEW

先生方からのご意見を
紹介します

2026年4月号へのご意見

新たな提案ができるイノベティブな教師に

4月号の特集のCASE 1 北海道・市立札幌藻岩高校の記事で、「大切なビジョンを共有し、実現のために何をするかは任せてくれる」という對馬光輝先生の言葉に共感した。生徒と直接かかわる機会が少ない校長が現場の細かい事柄に口を出すと、うまくいかないことがある。ただ、現場から具体案もなく、相談されれば、校長は何かしら答えざるを得ない。教師は校長のビジョンを基にクリエイティブに発想し、新たな提案ができるイノベティブな存在になるべきだと思った。山形県立米沢東高校 高橋英路

前向きに捉えた点を管理職に直接伝えたい

4月号の特集（CASE 1～3）を読み、管理職の言動がいかに学校文化をつくるかを実感した。現場の営みを前向きに捉えて直接伝え、さらに外部へも発信していく。手厚すぎるようにも思えるその姿勢は、学校運営や学級運営の素晴らしい模範になると感じる。一教員の立場からも「今のアプローチは嬉しかった」といった具体的なフィードバックを管理職に率直に伝えていきたい。正解のない変化の激しい時代だからこそ、そうした双方向のやり取りが学校の安心感や安定感となり、組織全体が柔軟に試行錯誤できる土壌をつくるのだと改めて気づかされた。

神奈川県・横浜市立金沢高校 斎藤真彦

ビジョンに基づいて語り続ける必要性を実感

4月号の特集のタイトルである「なぜ、あの学校は人が動くのか？」について、「研究者の視点」の記事で帝京大学の町支大祐准教授が指摘した通り、教師が試行錯誤を繰り返しながら、自らの言葉でビジョンを語り、組織全体で取り組むことが重要だと思う。CASE 1～3の各校の共通点は、リーダーが結束し、何事もビジョンに基づいて現場の教師に語り続けていることだった。それは決して簡単なことではなく、途中で疑問や不安を抱えて立ち止まってしまうかもしれない。長期的な取り組みになることを覚悟して続ける必要があるだろう。東京都・私立岩倉高校 松本祐也

社会の変化を敏感にキャッチし、指導を更新していく

4月号の「指導変革の軌跡」の記事を読み、およそ10年周期で東日本大震災やコロナ禍といった社会を揺るがす出来事が起こり、その影響を受けて、人々の学校教育への価値観や関心が大きく変化してきた軌跡を実感した。これからの社会を予測することは困難だが、だからこそ学校現場には、社会の変化を敏感にキャッチし、変革を恐れない姿勢が不可欠だ。どのような社会が到来しても主体的に生き抜いていくための資質・能力を生徒が身につけられるよう、カリキュラムや日々の指導を更新していきたい。

静岡県・私立静岡サレジオ高校 神谷隼基

探究学習では生徒の課題設定が重要

4月号の「『やらされ探究』から『マイ探究』へ!」の福井県立坂井高校のウェブ連載記事を読み、探究学習では生徒が自分にとって重要だと思うことを課題に設定すべきだと改めて感じた。「興味のあることがない」「部活動で忙しい」といった生徒もいる中で、生徒が社会にかかわる機会を持てるように声をかけるとともに、活動の前と後で自身の変化を振り返ることができるようにしていきたい。

北海道 匿名希望